

適応指導教室の支援と学校・保護者・他機関との関わり ～自己(他者)理解の深化とバイアス(偏り)を意識して～

提案者 栃木市立栃木東中学校 教諭
琴 寄 裕 光

1 はじめに

令和元年度の児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果によると不登校児童生徒が18万人を超え、前年度から約2万人も増加していることが示された。学校は不登校の解消の為に様々な取組をしているが、不登校児童生徒数は毎年増加傾向にあり、教育関係者は特に危機感を募らせている。適応指導教室では、学校と連携を図り不登校児童生徒に寄り添いながら生徒理解に努め、個々に応じた支援を行ってきた。そうして見えてきたことは、生徒の自己(他者)理解の希薄さと考え方のバイアス(偏り)である。これは、児童生徒だけではない。関わっている大人の自己(他者)理解とバイアスも同様に存在し、それらを意識して支援をしていくことが不登校解消への方策の一つと考え、提案する。

2 提案内容

(1) 研究概要

学校危機管理を考える際に、まず防災教育が挙げられる。平成25年に「学校防災の参考資料」生きる力を育む防災教育の展開(文部科学省)(注1)の中に、東日本大震災の教訓から「心理的特性(正常化の偏見(バイアス))」のが記載されている。不登校とは関係ないようと思われるが、このバイアス(注2)が不登校の問題にも大いに関係している。

(注1) 日常生活においても状況を判断し、最善を尽くそうとする「主体的に行動する態度」を身に付けさせることが極めて重要である。その際には、人間には自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価したりしてしまう心理的特性(正常化の偏見(バイアス))があることにも注意が必要である。(「防災教育の参考資料」抜粋)

(注2) アンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)は、誰もが潜在的に持っているバイアス(先入観、思い込み、決めつけ)とされる。育つ環境や所属する集団のなかで知らず知らずのうちに脳にきざみこまれ、既成概念、固定観念となっていく。(平成31年度「次世代のライフプランニング教育推進事業」抜粋)

不登校児童生徒のイメージにバイアスがかかり偏った理解をされてしまう。

「不登校児童生徒は無気力で口数が少なく黙っていることが多い」ことから「理解できない」と一面的に考えられたり、「昨日登校すると約束したのに次の日に登校できない」ことから、「我儘や怠惰」と思われたりする。多面的理解を心掛けることが不登校の適切な理解につながる。

(事 実)	(バイアス)	(多面的理解)
無気力・無口	→ 理解できない ⇒ なぜ無気力・無口なのか?	
約束したのに登校できない	→ 我儘・怠惰 ⇒ なぜ登校できなかったのか?	

①【適応指導教室の支援】

ア バイアスに捉われない多面的実態把握：「発達」「心」「環境」の3視点から把握する。

イ 自己理解を深める支援。

②【学校・保護者・他機関と適応指導教室との関わり】

担任や保護者・他機関とは、自分や相手の無意識のバイアス（偏り）を意識して関わる。

(2) 研究実践

①ア【実態把握】⇒多面的理解

適応指導教室では、児童生徒の実態把握に多面的理解を行う3視点（発達・心・環境）を設けて個別支援シートを作成している。（別紙）

【発達】未発達の機能や発達障害の状態。

【心】強い不安や硬い思考の状態。

【環境】家庭や学校・社会に適応できない状態。

イ【自己理解】⇒他者からのプラスの声掛け

不登校児童生徒は感受性が強く他者の言動に強く反応し、自己の言動は意識していないことがある。自分に目を向けることで、周囲からの影響を抑え、安定する。適応教室では指導員との良好な関わりの中で、プラス（褒める・認める）の声掛けを繰り返して自己理解を意識させている。

自己理解の深め方【自分の言動を意識させる】

エゴグラム の実施	<ul style="list-style-type: none">●自分の言動に着目させるために質問項目に素直に答え、グラフ化をして自分の言動を意識する。●現在の自分の状態を知り、これから目標を設定する。●年度末に、2回目の質問を行い、前回のグラフとの違いを確認して、成長を確かめる。
指導員の 声掛け	<ul style="list-style-type: none">●指導員の相談的姿勢（傾聴・共感・受容）で関わる。●よい言動には、「いいね」やOKサインを送り、認めて強化する。 「そこが、あなたのよさだね。」と言葉にして意識させる。●不適切な言動には注意指導ではなく、児童生徒に「それでいいかな」「どう思う」と問い合わせ、考えられない場合は、2~3の選択肢を提案して自分で選択したように本人に選択させる。次回もできたら褒める。●自分の苦手なところは「これも自分」と受容できるよう意識させる。
卓 球	<ul style="list-style-type: none">●毎日の卓球で気分転換を図る。体を動かすことで緊張がほぐれる。●プレーに気分が表れるので気持ちが他に向いている場合は「集中！」と声を掛け慌ててプレーしているときは「落ち着け」、緊張しているときは「深呼吸」等、短い言葉を掛け、自分の体を調整する意識を高める。

②【学校・保護者・他機関と適応教室との関わり】

大人（学校・保護者・他機関）の中には、「子供は未熟な存在」というバイアスが働きやすく、子供から学ぶ姿勢を失ってしまう人がいる。子供から学ぶとは、「子供の言動を観察すること」である。子供は、いろいろな情報を発信している。適応指導教室はそれを受け止めて、関係する大人と連携して環境調整を図っている。

	バイアスの例	適応指導教室の関わり
学 校	<ul style="list-style-type: none">●学校と保護者の考えがすれ違ってから適応指導教室に来る。●学校は「不登校の主な要因は家庭」と捉えることが少なくない。	<ul style="list-style-type: none">●適応指導教室では生徒の多面的情報と努力している様子を学校に伝えたり、学校ができる支援を提案したり、不登校の原因を探り、改善を図る。
保護者	<ul style="list-style-type: none">●保護者は「登校しようとすると腹痛や頭痛等の身体症状がでる」ことから要因は学校と捉えやすい。	<ul style="list-style-type: none">●子供の多面的情報と努力している様子を伝え、保護者の辛さに共感することで、学校への不満から子供のよさを伸ばす視点に変える支援を行う。
他機関 (市福祉部・児童相談所・医療等)	<ul style="list-style-type: none">●他機関は立場の違いから、適応指導教室に教育支援センターのような過大な期待をもちやすい。	<ul style="list-style-type: none">●適応指導教室では他機関の担当者との理解を深めバイアスを意識して「可能な支援」を確認しながら関係作りをしている。

(3) 研究成果

- ①児童生徒の多面的理解と支援により、児童生徒の自己理解が深まると他人への批判は少なくなり、周囲を好意的に見る前向きな言動が増えてきた。
- ②学校や保護者に児童生徒の不安や悩みを伝え、バイアスを下げて具体的な関わり方を提案した。その結果、子供が意欲的に生活できるようになった。
- ③学校や保護者の双方に関わることで、3者の良好な関係を築くことができた。

3 今後の課題

不登校支援は、生徒の実態が毎日変化することを常に意識しなければならない。観察や情報を分析する際にバイアスがかかっていることを考慮し、児童生徒の多面的な理解を一層深めていくこと、関係する大人のバイアスを意識して、連携していくことが課題である。